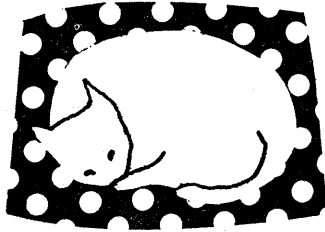


近代短歌に現われた子ども

(六)



大塚 雅彦

(11) 島木赤彦

赤彦の本名は久保田俊彦、明治九年信州の上諏訪町の塚原家に教員の子として生まれた。長野師範に入学する前後頃より「少年文庫」等の諸雑誌に新体詩や短歌を投稿。下諏訪町高木の久保田家の養嗣子となり、師範卒業と共に教員生活に入る。明治三十六年、諏訪で同人誌「比牟呂」を創刊して編集に当る。明治四十二年、中央誌の「アララギ」と合同した。大正二年、歌の師伊藤左千夫が逝去、翌年三月、諏訪郡視学を退職、四月単身上京、「アララギ」を編集すると共に、淑徳高女に教鞭をとる。大正六年以降は東京では「アララギ」の編集者、信州では「信

濃教育」の編集主任として奮闘した。特に「アララギ」を歌壇の中心誌に育て上げた功績は大きい。大正十五年三月、郷里の自宅で胃癌のため死去、五十一才であった。歌集は六冊あるが、終始「写生」を説き、「鍛錬道」を提唱し、晩年には幽玄寂寥の境地を確立した。万葉集研究書や歌論の著書もある。岩波書店から再度にわたって全集が刊行されている（新版へ昭44〜45）は全九巻・別巻二）。

① 幼な手に赤き銭ぜにひとつやりたるはすべなかりける我が心かも

② わが側そばに子は立てりけり顔洗あふ間まをだに父を珍らしがるか

③ 玉きはる命のまへに欲ほりし水をこらへて居よと我は言ひつる

①は大正三年作で、歌集『切火きりび』（大正4刊）所収。

「国を出づる歌」一連の中にある。前述の如く大正三年、赤彦は妻子を郷里にのこして単身出京した。出郷ということは地方在住の人間にとっては、生涯の転機にかかわ

る大事件であり、芭蕉など有名な出郷の句をのこし、歌人では赤彦の同僚であった古泉千樞などもすぐれた出郷詠をとどめている。赤彦はこのとき既に三十九才の中年であり、実に六人の子の父であった。それだけに複雑な心境であつたろうし、並々ならぬ決意を秘めていたにちがいない。上京の直接の目的は「アララギ」の立て直しと経営のため、家庭を犠牲にして出慮したように一般にはいわれているが、親友の中村憲吉は、赤彦の上京をそのような英雄的行為視されることは赤彦の本意とする所でなく、却って赤彦が当惑するだろう、他に上京の動機には複雑な内面的事情があり、赤彦は内面的苦悶を潜めていた、という趣旨のことを書いている（「アララギ二十五周年記念号」）。戦後明らかにされたところでは、校長をしていた赤彦は部下の女教師中原（後に嫁して川井姓）閑子（本名シヅ子）と恋愛関係にあり、赤彦が信州にとどまるわけにいかない事情があつたようである（川井静子著『桔梗ヶ原の赤彦』昭和32・3等、参照）。このことは従来、謹厳一筋と見られていた赤彦の、むしろ

る人間性を語るものであろう。

それは兎も角として、出京の日の実情については赤彦自身「家を出たのは四月十日であった。湖沿いの県道には午前七時の日ざしが霜に淡すく光って居た。子供が三人後から蹶いて来た。そして一停車場の間だけ一緒に乗って別れた。子供の顔が最後に車窓の外に流れ出した時私はそこに全く信濃から別れていた」と書いているのが、①の歌を味わう参考にならう。この歌の前には「三人の子だまりてあとにつき来る湖の朝あけは明るぐるしも」という作品もある。「赤き銭」というのは銅貨である。私の子供の頃、親から貰う小遣いは赤銅色をした一銭銅貨か、多いときで二銭銅貨であった。(赤彦の明治四十五年作に「大槻の冬木の家に灯ともして銅の銭かぞへけるかも」という歌もある)前田透教授は「幼い子がいつまでも道を追ってくる。それをかえすためにその手に一枚の銅貨を握らせたのである。視学の職を捨てて、前途さだかでない文芸の道へ突進せざるを得ない生き方を自ら怒る気持もあったらう。それが子への愛憐の思いと重

なってへすべなかりける」と詠歎したのである(斎藤史・前田透編『短歌読本 家族』昭56・10)と述べ、また、加藤晋一郎氏は「まわりの雰囲気のかたきにならぬ物の子供心に感じとって、黙しつづ父の後に従う。そんな子供達を見るに忍びず、かと言って慰むべき何の言葉も見当らず、へ赤き銭ひとつやりたる」ことで自分の非の代償として赤彦の姿は、全くへすべなかりける我が心かもであったことだろう(加藤編『信濃の赤彦——赤彦の寂寥観(上)』昭46・6)と、やや違った鑑賞をしている。ちなみに、追ってきた「三人の子」というのは、六人の子供のうち、年長の政彦・はつせ・健次の三人であろうか。「湖」はもちろん諏訪湖である。

②も同じく大正三年作で『切火』所収。その夏帰省した折の作品である。久しぶりに帰って来た父を慕って、父にまつわりつく子供の姿を生き活きと描いている。三句から結句にかけての表現は絶妙である。「珍らしがるか」の「か」は感謝の助詞。「ちちのみの父婦れども寂

しきか子はものを言ふ父の膝に来て」（大正四年作）という、やや違った作品もある。

③は大正六年作「逝く子」一連の中の一首であり、歌集『氷魚』所収。末尾には「大正八年成る」の注記があるが、この歌のモデルの長男政彦の没年によって六年作としたらしい。「病むこと十日。十二月十八日午前零時半小石川病院に逝く」の詞書がある。急性盲腸炎で入院、腹膜炎を併発して逝去、十八才であった。この政彦は明治三十三年生まれだが、満二才足らずで生母うた（赤彦の先妻）に死別した薄倅の子であったばかりでなく、病弱でもあったようで、その病気のたびに赤彦は格別の憐愍の情を注いで歌を作っている。例えば明治三十七年には「児の眼病三月に互りて未だ癒えず。悲しみて詠める」の一連があり、三十九年には政彦の眼病再発やジフテリアに心痛する「歌日記」の一連、更に大正二年には「子の眼病に重大なる疑問を宣せられて直に東京に向ひぬ（下略）」の詞書のある「病院」の一連等があり、この大正二年作の中には「父はけふ国にかへると聞きわ

けし幼き顔を見てやりにけり」のような佳吟がある。③は遂にその子が若い生命を終ろうとして、死の直前に（「玉きはる」はいのちの枕詞）欲しがった水を、父親の自分は「がまんしなさい」と言ったその苦しい胸中、医者への指示か何かによって末期の水をすら与え得なかつた一見非情なその行動に堪えがたい思いがしていることを、抑えた表現で詠出している。本林勝夫教授は「嘆きの声を押えることによって嘆きのふかさを訴える——それが赤彦の歌の特色であった」（本林、前掲『現代短歌』）と述べているが、至言であろう。この歌の前後には「幼きより生みの母親を知らずしていゆくこの子の顔をながめつ」「田舎の帽子かぶりて来し汝れをあはれに思ひおもかげに消えず」等の作品もあり、赤彦の慟哭を知ることができる。

④今日受けし試験危しと来て告ぐる子どもの顔は親しきものを

⑤土の上に白き線<sup>すじ</sup>引きて日ぐれまで子ども遊ぶ春となりにけり

⑥隣室に書よむ子らの声きけば心に沁みて生きたかりけり

④は大正八年作で、「三月」という題の一連の中にある。『氷魚』所収。歌意は明瞭である。「三月」の試験期、受験する子どもも、また親もピンと神経を張りつめている季節である。そんな折、今日試験を受けて来て「お父さん、今日は出来なかったから駄目らしいよ」と淡々と告げる子に、心配していた親の作者の方がガッカリしながらも、子どもが深刻になつていないのに、むしろホッとしている。そんな親子の心理が微妙にうたわれていて、かすかなユーモアすら漂っている歌。「ものを」の「を」は詠嘆の助詞。

⑤は大正十二年作で「春」一連の中にある。歌集『太虚集』所収。春の来るのがおそい信濃路——しかし、漸く此処にも春が来たのだ。それを何よりも先に感じて行動で現わすのは子どもだ。地面に白い線をひいて遊戯をして、日ぐれまで遊ぶ子ども。ああ春なのだなあ。——そんな意味でもあろうか。この遊びは次の歌の「春はま

だ土踏む足の冷たからむ草履がくしを子らのして居り」からすると「草履がくし」らしい。いずれにしても子どもは遊びの天才だ。信州出身の古島敏雄博士（東大名譽教授）は近著『子供たちの大正時代——田舎町の生活誌』（昭57・5）に於て、郷里飯田地方にあった子どもの遊びのさまざまを克明に述べている。しかし現代では地面の遊びや野の遊びは子供たちから次第に失われてゆくようだ。

⑥は人口に膾炙した名作で、教科書にも多く採用されている。大正十五年作で「恙ありて二」の中の一。歌集『柿蔭集』所収。「心に沁みて」は「切実に」「しみじみと」の意。「生きたかりけり」の「けり」は詠嘆の助動詞。この年三月に死去した赤彦の最晩年の病床談で、「二月十三日帰国晝夜痛みて呻吟す。肉瘦せに瘦せ骨たちにたつ」の詞書があり絶詠の一つといつてよい。

この歌では隣室で声を出して本を読んでいる子供たちは、幼い子供のように感じられるが、この「子ら」は當時十六才になっていた夏樹（四男）や十八才のみを、（三

女)を指すようで、そうだとすれば一般の解釈にみるような無邪気な声ではなく、むしろ父の病気をはばかりのひそやかな声であり、それが却って作者の心を堪えがたくしているとみるべきである、と本林勝夫氏は述べている(本林、前掲書、及び『現代短歌評釈』昭41・2所収、本林「島木赤彦」)。前に挙げた落合直文の「父君よ今朝はいかにと手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり」によく比較されるが、赤彦作の方が切実性が溢れ、優れているよう。

## (12) 中村憲吉

憲吉は明治二十二年、広島県双三郡布野村に生まれた。県立三次中学、七高を経て東大経済科卒業。大正五年郷里に帰り、家業の醸造業に従事する。その後一時、郷里を出て大阪毎日新聞記者となったが、大正末年に家督相続のため再び帰郷。肋膜炎を病み、昭和九年、転地先の尾道市で没した。四十五才である。作歌は明治四十

二年伊藤左千夫門に入り、「アララギ」の幹部として終始した。歌集は五冊。岩波版『中村憲吉全集』全四卷(昭12—13)があり、『中村憲吉全歌集』(昭41、白玉書房)もある。彼は自らの作歌について「拙修」の道と称し、苦吟したが、早くから鋭敏な感覚にすぐれたものを見せ、次第に写生的な深みを加え、静謐にして醇厚、幽微な調べをもつ作品を多く生み、その詠風は高雅清澄、気品にみちていた点では歌壇でもあまり類がない。

①麗はしき日向へつれぬみどり児の柔頬は透きて血潮  
さすみゆ

②秋されば孫にも米を背負はしめ山の家より人きたり  
たり

③父われの世わざに迷ふ寂しさを知らざる子等の手を  
ひき遊ぶ

④父君を嘆きあふ子よさきはひは昨日にありて今日に  
失ふ

①は大正六年作で「初笑」と題する八首中の歌。第三歌集『しがらみ』所収。「二月二十四日。長女生る」の

詞書がある。この娘は良子（長じて安田家に嫁す）で、初の子どもであったので、ことさら可愛いかつたのである。嬰兒の柔らかい頬が透いてあかい血潮がさしている、という表現は実に鋭敏な感覚で、乳児のみずみずしい桃のような頬が陽の下にかがやくのが眼に見えるようである。憲吉は前述の如く早くから繊細な近代感覚にすぐれ、官能的ともいえる程の把握に長じていたこと、大正三年作の「篠懸樹フリスチナスかげ行く女こらが眼蓋まなぶたに血しほいろさし夏なつさにけり」のような歌があることでも知られるのである。

②は大正七年作で「寒しぐれ その二」の一連中にある。やはり『しがらみ』所収。大正五年十月、郷里からの督促により、都会生活を捨てて帰国して家業に従事することになった憲吉は、狭い田舎の寂しさや家庭の煩累や土俗の因襲や人間関係の面倒臭さの中に苦痛を感じたが、一方では日を経るにしたがって村人たちとの接触も深まり、彼等に親しみを抱くようになり、素封家の旦那（地主でもある）として彼等と交わり、「真意義ある人間

社会生活は田舎で感得することが出来るのである」（『しがらみ』編集雑記）と考えるようにすらなつた。したがって、小作人の生活などにも深い関心を持ち、その行動を描く歌を作ったりする。②は老いたる小作人が、幼ない孫にも米を背負わせて山の家からやって来たのを詠じたものであることが、この歌の前後の作品で知られる。「純朴で律気な山の小作人のふるまいに対する感動をこもらせている」（木俣修、前掲『近代短歌の鑑賞と批評』）のである。なお、「酒買ひに朝早くより来る子あり徳利を抱きて震ふるへたるあはれ」という歌も『しがらみ』にあり、貧しい山村の、飲んべえの父親を持つ子のあわれさのようなものが滲み出ていて、こんにち読んでも考えさせる内容ではあるまいか。

③は大正十年作で、「折にふれ」八首中の歌である。やはり『しがらみ』所収。大正九年三十一才の頃、憲吉は郷里を再び出て、兵庫県西宮市外に居を定め、関西方面に職を求めたが、なかなか見つからなかつた（翌十年十一月、前述の如くやっと新聞記者の仕事に就く）。職な

くて居たわけで、この歌はそんな折、「父である自分が、如何なる生業に就こうか」として迷っている、この寂しい気持を少しも知らないでいる子供らの手をひいて遊んでいた」「妻子とともに一借家に住み、自力の生活を未だ立て得ないで、徒食を歎いた歌である」（高田浪吉『歌人中村憲吉——その短歌作品』昭13・11）。一首にえも言われぬ哀調がある。なお、これに続いて「この子らをはぐくむ我と思へばあに生業のなき父たりなむや」「松の根に躓きつまづく児の手ひき現身われはさみしくもの思ふ」等の作品がある。

④は昭和九年作で「御遺族」という小題のある一首。憲吉没後に刊行された遺歌集『軽雷集以後』所収。「アラギ」派の歌人（歌集『寒竹』がある）であり、画家であった平福百穂画伯は、憲吉が最も敬愛し信頼する仲間であり、先進であった。その百穂は昭和八年十月、郷里の秋田県に帰り、横手町で急逝した。憲吉のなげきは大きかった。同年「悼平福百穂畫伯」八首をつくり、翌九年にも「平福畫伯を悲しむ」三首をのこしている。自

らも病床にあった憲吉のこれらの挽歌は、深い悲しみを湛えた真情流露の作品であるが、④ものこされた遺児たちを思いやる憲吉のやさしさが溢れており、「さきはひは昨日にありて今日に失ふ」という表現が、無常迅速、諸行無常の思いをみごとにとどめている。私が早くから愛誦して来た大好きな歌である。なお私は先日、松本幾世著『回想 平福百穂先生』（昭56・3）の出版記念会の折、この百穂の遺児たちの長じられた姿に接し、話し合うことが出来たが、「この人達が憲吉のあの歌のモデルなのか」と思い、感無量であった。

（お茶の水女子大学）

